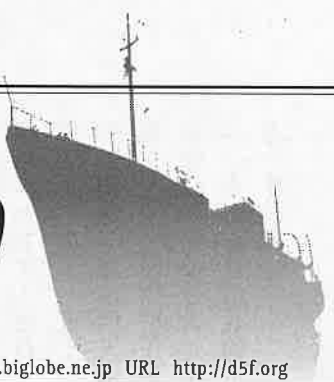


都立 第五福竜丸展示館ニュース

2005.12.01
No.325

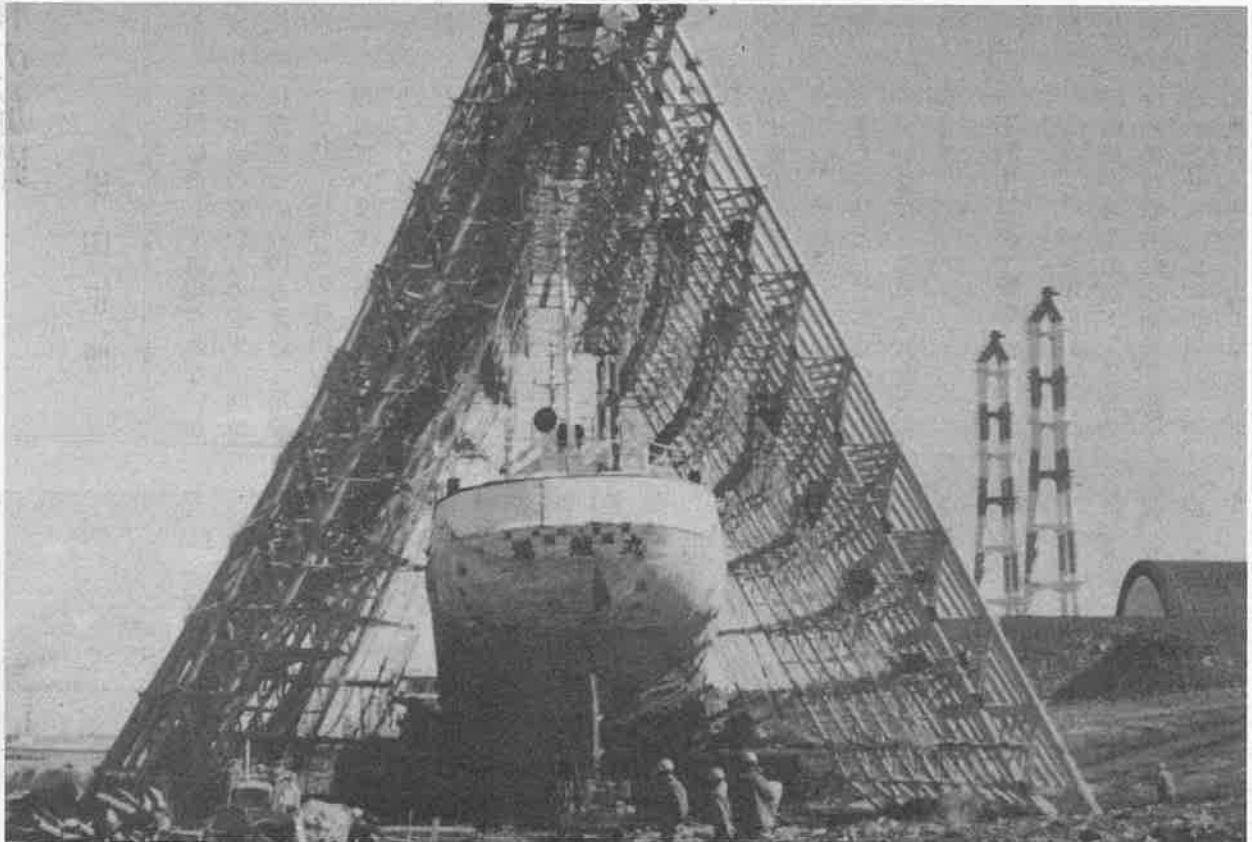
福竜丸だより



発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

〈写真でたどる開館30年のあゆみ〉

夢の島公園の造成とともに第五福竜丸展示館の建設すすむ。一九七六年春ごろ



展示館開館三〇周年にむけ 記念プロジェクトの計画すすむ

第五福竜丸展示館は、来年二〇〇六年六月に開館から三〇年を迎えます。

一九七六年六月一〇日、夢の島公園に第五福竜丸展示館はオープンしました。当時は、交通の便が悪く、地下鉄東西線の東陽町からの都バスが開通したのはその年の一〇月、その後、公園の整備がすすみ、

総合体育館（七六年一月）、熱帯植物展示館の開館（八八年一月）、新木場駅への地下鉄有楽町線（八八年六月）とJR京葉線（八八年二月）、南舟橋―新木場間、九〇年三月東京駅―新木場間）の開通で来館者も急上昇しました。

この三〇年間のなかでは、第五福竜丸の船体が大きく割れそうになるという危機に瀕した八五年、木造文化財保存の専門家と船大工の棟梁の指揮のもとに大補修が一年二ヶ月かけておこなわれています。

第五福竜丸平和協会は、昨

年のビキニ被災五〇周年の記念プロジェクトにつき開館三〇年を記念して、「三〇年のあゆみ」「第五福竜丸の大補修」特別展と記念誌の編集発行、記念コンサートをはじめ記念の諸事業についての検討をすすめています。

理事・評議員懇談会開く

第五福竜丸平和協会は、一月二六日に理事・評議員合同の懇談会を開催しました。会では、川崎昭一郎会長より来年の開館三〇年記念事業について報告され、意見交換しとりくみの体制などを検討しました。

この日の理事・評議員会には、一名が出席し、展示館で開催中の特別展「手紙―託された心」を見学、つづいて熱帯植物館を訪ね吉川管理係長の案内をうけた後に館内をまわり、スポーツ文化館レストランにて懇談しました。

いのち Ⅱ 平和の旅路

岸田 正博

人が亡くなられたとき、しばしば「旅立たれる」と表現されることがあります。それは私たちが知っているこの世界を中心に捉える考え方から表出する当然の感慨ともいえ、るでしょう。しかし、旅は仮の期間です。そこには、また帰って来て欲しいという願望がこめられているのかもしれない。

しかし、諸行無常と説かれるように同じいのちという

岸田正博氏プロフィール

一九五二年三月一日生、五三歳。真言宗智山派隅田山多聞寺住職、アジア仏教徒平和会議日本センター役員、多聞寺は天正年間（一五七三―一九二一年）創建、毘沙門天木立像安置、山門は墨田区指定文化財、本堂に久保山愛吉碑拓本を掲示。本年より第五福竜丸平和協会評議員。

現象は決して再現されないか

けがえのないものです。同時にひとつのいのちという現象（存在）は無数の連鎖の上に見えています。そもそも自分という存在は自分自身が創り出したものではありません。両親から遡る生物としてのつながり、いわゆるご先祖も無数のほりまします。そのひとりひとりが、呼吸をし、水をのみ、他の生物を食べてきました。こうした生物的存在としての自己も無数の連鎖の中にあります。すべての存在（現象）は、それぞれが原因としてまた条件としてつながりあっています。これを縁起と言います。

不殺生は第一義の戒

では、その根本の原因は何時何処からなのか？ 仏教では究極の原因たる絶対存在を認めません。仏の世界は、無始無終・不來不去つまり時間

久保山碑の拓本と岸田さん



的にも空間的にも無限なの

です。自身が誕生するまでの過去は無限であり、死後の未来も無限です。ですから、仏教では生れてくる前と死んだ後をつなぐごく限られた一期（一生）が旅に喩えられます。

生れた時が旅の始まり、今私たちは旅路の途中にありますが、故郷を忘れ、否、旅であることを忘れた人間が作り出した「価値」＝煩惱の虜にされてしまいました。そしてより多くの価値を集約できる権力が支配するところとなりました。その権力の維持と拡張のために手放すことができない存在が核兵器です。核兵器は煩惱の究極的ですがたです。

本来、人間という旅路での行為のひとつひとつが何かの原因となり何かの結果をもたらす、それがまた何かの原因となる縁起に立てば、私たちの生きるありかたそのものが重要な意味を持つているのです。ですから殺すということとは縁起のつながりを絶ちきることに成り、不殺生は第一義の戒に位置付けられます。

いのちと平和とは

しかし、縁起というすべてのつながりの中での存在であることを忘れ、むしろ人間相互のつながりを切り離れた上に成り立つ権力は、必然的に他の権力との抗争を招いてきました。その結果、他方を殲滅させるといふ短絡的・情緒的大量殺人行為を「戦争」として制度化するに至ったのです。核兵器は、この大量殺人行為を最も効率的な規模に成し得る手段です。それは、保有しているだけで敵に対する脅かし（抑止）になり、恐怖の連鎖となつてこの旅路を暗黒化しいのちを抑圧していきます。

いのちと平和は、その危機

に直面したとき極めて等しい意味をもつこととなります。平和とは単に、戦争の無い状態ではなく、いのちが脅かされることの無い安らかな旅路が保障されている状態を表しています。

「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という故久保山愛吉氏の悲願が成就できずにある現在社会は、平和からかけ離れた危機に瀕していることとなります。

物質の消滅という莫大なエネルギーを殺戮と破壊に利用する核兵器は、様々なつながりとしての「存在するもの」を消滅させてしまふ、反いのち・反平和の権化です。核兵器が有るといふこと自体が、人間の意識や意志を邪悪に染めてしまいます。

戦争という短絡的・情緒的大量殺人行為を否定し、そのためには手段としての軍備も否定したのが「憲法九条」です。

第二項の改悪は手段としての核兵器の存在を認め、平和のもとに在るべきいのちを根本的に否定していくことになつてしまいます。

はやぶさ丸誕生の地を訪ねて

眞野 節子



海の博物館第五福竜丸の模型

一月六日―七日、ボランティアの会では第五福竜丸ゆかりの地、三重県伊勢市大湊と鳥羽を訪ねる研修旅行を行いました。ここは第五福竜丸

が東京水産大学の練習船になるに^{あたり}、はやぶさ丸に改造した強力造船所^{こうりき}のあった地です。また鳥羽にある海の博物館、水族館等も見学。日ごろ船や魚についての質問を受けることも多いため、メンバーは熱心に見学、勉強しました。

* * *

研修一日目は生憎の雨。

最初に鳥羽市の「海の博物館」を訪ねた。ここには大石又七さんが寄贈した第五福竜丸の模型が展示され、また第五福竜丸の海図七枚（第七事代丸時代のもの）が所蔵されている。館長の案内で漁業にまつわる収蔵庫を見学、木造船の収蔵庫は圧巻だった。

海の街 大湊へ

研修二日目、昨日の雨も上がり快晴。鳥羽水族館を見学後、目的地の伊勢市、ゴリーキ・アイランドをめざす。強力造船所の跡地である。特急電車とタクシーを乗り継ぎ到着。穏やかな笑みで強力修さん、敦さんご兄弟を迎えてくれる。お二人ともゴリーキ・グループでそれぞれ会社を経営しておられる。現在造船業は廃業されたが、海や造船技術を生かした仕事に従事されているそうだ。はやぶさ丸への修理改作作業に当たった木村九一さんも加わり、大湊の町が造船業盛んだった時代の話、伊勢神宮とのかかわり、木造船ドンドコ丸、屋形船さくら丸の建造のことなどが語られた。

船に命をふきこむ仕事

ビキニ事件後、第五福竜丸を文部省（当時）が買い上げ東京水産大学の練習船とすることになったのだが、残留放射能を心配して船の修理を受ける造船所がなかった。それを当時の強力善次会長が引き受けたのである。辰夫社長（修・敦さんの父）は出張中

のことだった。地域の中傷・非難を覚悟の上の決断だったといえ大変な勇気のいることだったろう。実際、大変な非難を受けたという。

しかし善次会長、辰夫社長の船に対する頑固なまでの愛情と情熱は誰よりも強かったものと思う。これらの方々の並々な努力と船への愛情

造船所跡、船の進水式の軌道で



があつて、第五福竜丸はいま展示館で多くの見学者に核実験被害の実態と、核の恐ろしさ平和の尊さを訴え続けることができるのだ。

善次・辰夫両氏のお人柄、心の広さを、お話くださったお三方の中にも垣間見たように感じた。

未来へ向けて

地元の新鮮なお魚に舌鼓を打ったあとは、かつて進水式を行った場所を見学。進水式は真夜中の一二時を合図に行われる神聖な儀式だと初めて知った。修理改造され塗り替えられ、はやぶさ丸に船名を

変えた「元第五福竜丸」もここから東京へ向けて、静かに出航していったのだろうか。

木造船から鉄鋼船、アルミ船へと造船の姿は変わった。この街もゴリーキ・アイランドにも穏やかにゆったりと時間が流れ、時代を刻んでいる。今回見たり聞いたりしたことを、これからのボランティア活動にどう肉付けしていくのか、などと思いつつ東京に戻ってきた。充実した研修旅行、参加できたこと本当に良かったと思いました。

（第五福竜丸ボランティアの会）

* * *

（編注）一九五六年、強力造船所が第五福竜丸の修理・改造を引き受けたニュースは地元の新聞にも掲載され、造船所の壁には放射能を怖れ反対ビラが貼られたという。造船所の工員たちは風呂屋に入るのを断られたこともあったというが、善次さんは毅然としていた。工員たちの不安を解消するため大学の先生に安全性の講義をしてもらうなどの努力もされた。参考『航跡消えず 強力辰夫伝』

来館者の声より

◇憲法問題が検討される年代、再びここを訪れて感性を磨きたいと思いました。(60代 男性)

◇全人類に対する一大警告です。日本人全部の人に見てもらいたい。久保山愛吉さんの命日をビキニ水爆の厳しい反省の一日としてマスコミに毎年放映していただき、平和の尊さ、戦争軍拡競争のおそろさを再認識してください。(70代 男性)

◇なにかすごいことを感じました。私はせんそうなんかしたくないです。これからも「平和」でいたいです(小学4年生 女子)

◇こんなにひどい被害が出ているのに、なぜ世の中はくだんが必要なのだらうと思いました。平和な未来がくることをねがいます。(4年生 女子)

◇死の灰を見ました。砂より小さくて、こんなに小さなものがどうやってたくさんの人を傷つけたのかと思いました。(4年生 女子)

◇戦争や実験という大義名分があれば人は人を殺してもいいという矛盾。誰も望んではいないことだし、なくなってほしいけど、人が人である限りなくなることはないのかもしれない。愚かな人間は大きなしっぺ返しがかかるのだと思わずにおれません(20代 女性)

手紙展・あなたからの手紙

■第五福竜丸へ。もうビキニ事件なんておこらないでほしい。久保山さんのねがいはかなっていないから、いますぐでもかなってほしい。(10歳 女性)

■10年後の自分へ。今日感じた核の恐ろしさを覚えているのでしょうか。

そしてそれを誰かに伝えたり世の中から核をなくすために何かをしているのでしょうか。しずて今から10年後世界は戦争がなくなっているのでしょうか？核のおそろしさ戦争の怖さを訴え、もっと平和な世界を。(23歳 女性)

■戦後60年の平和の日々へ。世界中の人々へ日本発の発信をしましょう。まだまだ地球上の多くの人々に日本の60年間の平和アピールがたりないと思います。(60代 女性)

■第五福竜丸へ。40年以上も前の同級生たちと見学できてよかった。久保山さんはじめ被曝した人たちのメッセージと一緒に読み感じ語り合いました。船の歴史、それに込められた怒り。それを見守り訴えていこうとされている方々にも感動しました。私には何ができると考えさせられました。(60代 女性)

平和学会でビキニ事件関係のセッションもたれる

11月12、13日に長崎市で開催された日本平和学会では、グローバルヒバクシャ研究会が中心となる分科会や討論交流会がもたれました。

グローバルヒバクシャ研究会は、広島・長崎の原爆被害をはじめ、ビキニ事件・核実験や核開発による被害など、世界の核被害・核問題を手掛けていこうという若手の研究者により創られ、平和学会の中では分科会として位置づけられています。会の代表者は、高橋博子(広島市立大学平和研究所所員)、竹峰誠一郎(早稲田大学大学院博士後期課程)で、いずれも第五福竜丸平和協会の専門委員でもあります。

今回の平和学会は、「原爆投下60周年の意味を問い返す」を共通テーマにおこなわれ、「グローバルヒバクシャ」分科会では、桐谷多恵子(法

政大学大学院生)「戦後広島・長崎の『復興』とヒバクシャの『原風景』及び竹峰誠一郎「塗りかえられるビキニ水爆被災像—放射性降下物の飛散に着目して」の報告がおこなわれました。シンポジウム「原爆投下と被爆体験」では、高橋真司(長崎大学)「原爆死から平和責任へ—被爆体験の思想化をめぐる」、木村朗(鹿児島大学)「原爆投下問題への共通認識を求めて」、高橋博子「原爆投下の人体実験的側面—軍事資料として扱われた被爆情報」の報告がありました。

また、11日の夜には、グローバルヒバクシャの研究会が開かれ、三根真理子(長崎大学)『長崎原爆直後の強雨後活動と調査』の報告と研究会メンバーによる著作『隠されたヒバクシャ 検証=裁きなきビキニ水爆被災』の書評会がおこなわれました。

ご紹介ください 第五福竜丸展の開催地

ビキニ水爆実験被災50年を機に巡回が始まった「第五福竜丸」館外展。展示の資料は、第五福竜丸関係パネル70枚、ロングラップのヒバクシャパネル50枚、現物資料60点。高知県自由民権記念館を皮切りに、立命館大学国際平和ミュージアム、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、枚方市市民ギャラリー(2006年2月予定)と続きます。またコンパクトセット(パネル55枚)も西宮市、焼津市、岸和田市、愛知・大口町、鹿児島市(平和のための戦争展)などで活用されています。

ぜひお近くの自治体、郷土資料館や博物館で平和に関する企画展などを実施しているところがあればご紹介ください。展示内容・費用などの詳しいカタログをお送りします。